

幼児期の対人行動と他者理解の関係

吉村 斉¹⁾

Relations between interpersonal behavior and understanding of other's mind in early childhood

Hitoshi YOSHIMURA

Abstract

This study examines relations between children's exclusive behaviors and understanding of other's mind in early childhood. Participants were 55 4- or 5-year-old kindergarteners. Other's mind was constructed by false belief, belief, desire, and intention. The research was conducted by interview method. The following results were obtained: When children's interpersonal behaviors were exclusive, the boys attributed other's intention as more malicious than the girls. When they were not exclusive, on the other hand, the boys and the girls did not feel malicious. We conclude that exclusive behaviors had a great influence on children's understanding of other's mind in early childhood.

Key Words: exclusive behavior, understanding of other's mind, early childhood.

問 題

幼児期の仲間関係の意義の1つに他者理解が挙げられる(斉藤・木下・朝生, 1986)。他者の意図を構成する要因として信念と願望が存在することは, Wellman (1990) より指摘された。吉村 (2002) によると, 他者の信念や願望の理解と対人行動のあり方の関連が示唆されている。しかし, 従来検討された研究では, 子どもに対する課題の中に信念が示されていたこともあり, 信念の本質を理解したとはいい難い (Perner, 1989)。信念は現実そのものを反映しない場合もあることから, 信念と現実との関係を捉えるためには, 誤った信念を理解できるか否かが重要な意味をもつこととなる(橋本, 1996)。そこで, 本研究では, 幼児の誤った信念(以下, 誤信念), 信念, 願望, 意図の理解が, 対人行動のあり方に応じて異なるか否かを検討することとする。

幼児期の他者理解に関する研究では, いつできるようになるかに注目された研究も多数ある。

1) 高知市旭天神町292-26 高知学園短期大学 幼児保育学科

Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College, 292-26 Asahi-Tenjicho, Kochi, 780-0955

しかし、重要なことは、その年齢ではなく、できるようになるまでの過程や、またそれを規定する要因を明らかにすることである(吉村, 2003)。人の行動は、個人の要因だけでなく、その環境によっても影響を受ける(Lewin, 1951)。この場の理論に基づくと、個人の発達には、個人の要因だけでなく、外からの力によっても規定されると推察される。例えば、人の行動は、他者の存在や働きかけによって影響されている(内藤, 1986)。それゆえ、個人の社会性を考える上で、対人行動のあり方は、不可欠な要因といえるだろう。

吉村(2004, 2005)は、多様な仲間とかがわることが、個人の適応感に影響することを示唆している。とりわけ、他者の内的特性を正しく推論する他者理解に関しては、多くの社会的カテゴリーを要することから、多様な他者とのかかわりによって発達が促進されることが考えられる。例えば、特定の友人とばかり遊ぶことによって、それ以外の仲間とのかかわりが消極的になっている(以下、閉鎖性)ことによって、他者理解の発達に違いがあることが明らかにされれば、保育場面における集団活動のあり方を検討する上で、たいへん意義があると思われる。

また、他者理解についても、Moses(1993)のように、4-5歳児になると、「人物Aは物Xが場所Yにあると(誤って)信じている」とする一次的信念の理解は可能であることを指摘する研究は多い。「人物Aは物Xが場所Yにあると思っている、人物Bは(誤って)信じている」とする二次的信念の理解が可能になるのは児童期中期であることから(Perner & Wimmer, 1985)、幼児期で他者理解の発達が促進されるのは、一次的信念であると推察される。その一次的信念に基づいた他者理解の発達が、幼児の閉鎖性のあり方に依りて異なるとすれば、幼児期における他者とのかかわり方の重要性を確認するだけでなく、それを生かした遊びの種類を検討する上でも有益だろう。そこで、本研究では、対人行動の要因として閉鎖性を取り上げ、幼児期の閉鎖性と一次的信念に基づいた他者理解の関係を検討することとする。

では、閉鎖性と他者理解について具体的に検討する。齊藤・木下・朝生(1986)、吉村(2004, 2005)に基づくと、閉鎖性が強い子どもは、弱い子どもに比べて、他者を正しく理解できないことが予想される。とりわけ、男児の仲間関係は、勢力者を中心に展開されることが、齊藤・木下・朝生(1986)より示唆されている。勢力者は、遊びの中でさまざまな特権を持ちがちで、それに対する追従者の不満も多い。すなわち、勢力者の影響があまり強くない女兒に比べると、男児では勢力者の意図をいじわると帰属しやすいことが考えられる。それゆえ、閉鎖性が強い幼児の中でも、男児の方が女兒よりも他者の誤信念、信念、願望、および意図を正しく帰属していないことが予想される。逆に、閉鎖性が弱い場合、多様な他者とつきあうことによって、性別に関係なく、正しい他者理解が可能になるだろう。

以上のことから、本研究では以下の結果を予想して吟味することとする。

仮説 閉鎖性が強い場合、男児の誤信念、信念、願望、および意図の帰属は、女兒に比べて、いじわるに方向づけられる。

方 法

調査対象者 A県の私立幼稚園の4歳児クラスに所属する25名(男児15名, 女児10名), および5歳児クラスに所属する30名(男児14名, 女児16名), 計55名(男児29名, 女児26名)を対象とした。さらに、回答に不備があった9名を除き、46名を分析の対象とした。

手 続

1. 同性の友人関係の調査 同じクラスの同性の友人関係を把握するため、クラスの個々人に対して「1・ぜんぜん遊ばない」、「2・あまり遊ばない」、「3・たまに遊ぶ」、「4・ほとんど毎日遊

ぶ」で評定させた。

2. 閉鎖性の測定 各対象者の閉鎖性を測定するため、仲の良いグループで遊んでいる中で、日頃一緒に遊ぶことが少ない子どもから「遊びに入れて欲しい」といわれた時、どのような反応をするかを質問した。なお、日頃一緒に遊ぶことが少ない子どもを入れた場合、仲のいい友人が対象者自身が、その遊びから抜けなければならない状況になるよう設定した。すなわち、新たに仲間に入れる場合は閉鎖性が弱く、仲間入りを拒否する場合は閉鎖性が強いことが示唆されることとなる。

測定にあたっては、西頭 (1974)、ベネッセ教育研究所 (1999) を参考に、幼稚園内の代表的な活動場面として「粘土」、「絵を描く」、「積み木」、「ブランコ」を取り上げ、各場面における各自の反応を測定した。なお、測定にあたっては、1.の調査から、一緒に遊ぶ子どもを選出した。次に、対象者を含む仲良しグループの人数を5人として、実名を入れた。逆に、グループに入ろうとする子どもについては、1.で「ぜんぜん遊ばない」と回答された同性の子どもの中から、無作為に選出され、その子どもの実名を入れて質問を行った。

各場面の様子を示した絵 (Figure 1) を作成し、その絵を提示しながら読み聞かせた。その後、各児がとりたい対応を尋ね、「自分と交代してでも入れてあげる (1点)」、「自分は交代したくないけど入れてあげる (2点)」、「入れてあげない (3点)」から選択させた。作成された内容は以下の①-④の通りである。

①粘土の場面 いつも仲の良い A, B, C, D 君 (ちゃん) が粘土を使って遊んでいました。すると、E 君 (ちゃん) が「僕 (私) も粘土で遊びたいから仲間に入れて」とやってきました。しかし、机は4人でいっぱいです。座る椅子もほかにありません。E 君 (ちゃん) が粘土遊びをするには、誰かが代わらないといけなくなってしまいます。

②絵を描く場面 いつも仲の良い A, B, C, D 君 (ちゃん) が絵を描いて遊んでいました。すると、E 君 (ちゃん) が「僕 (私) に赤いクレヨンを貸して」とやってきました。しかし、みんなが赤のクレヨンを使っています。真っ赤なお花などを描いているので、すぐに終わりそうにありません。他のお友達は、みんなクレヨンを持っています。E 君 (ちゃん) が赤いクレヨンを使うためには誰かが絵を描くのをやめないといけなくなってしまいます。

③積み木で遊ぶ場面 いつも仲の良い A, B, C, D 君 (ちゃん) が四角の積み木を全部使って線路をつくっていました。すると、E 君 (ちゃん) が「僕 (私) に四角の積み木をちょうだい」とやってきました。しかし、四角形の積み木を E 君 (ちゃん) に1つでもあげると線路がなくなってしまう。他の四角形の積み木は残っていません。

④ブランコで遊ぶ場面 いつも仲の良い A, B, C, D 君 (ちゃん) がブランコで遊んでいました。すると、E 君 (ちゃん) が「僕 (私) もブランコで遊びたい」とやってきました。しかし、ブランコは4人でいっぱいです。E 君 (ちゃん) がブランコで遊ぶためには誰かが代わらないといけなくなってしまいます。

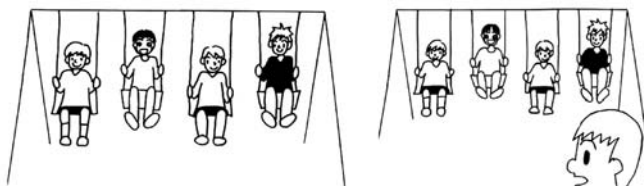


Figure 1 ブランコ場面を示した絵 (男児用)

2. 勢力者の指名 齊藤・木下・朝生(1986)によると、幼児期の仲間関係は、男児では勢力者を中心に展開されるが、女児では勢力者の影響はあまり強くないことが示唆されている。すなわち、仲間関係の性差を規定する要因として、勢力者の存在が考えられる。本研究では、齊藤・木下・朝生(1986)に基づいて、男児の勢力者の特徴(体力・体格・腕力、運動能力、遊びの情報の豊かさ、積極性)、女児の勢力者の特徴(言語レベルが高く他児を従わせる)に、クラスの中であてはまる子を指名させ、その勢力者の意図の理解を検討することとした。質問にあたっては、その特徴を示す絵(Figure 2)を提示した。



Figure 2 勢力者の特徴を示した絵(左4場面が男児用、右1場面が女児用)

3. 他者理解に関する物語の作成 他者の意図の理解を測定するため、相手の誤った信念を正しく理解できているか否かを測定した。具体的には、信念-願望推論モデル(Wellman, 1990)に基づいて、子安(1999)の一次的信念課題を参考に、物語を聞いている対象者は内容を把握しているが、物語に登場する自分自身はその状況を把握しておらず、それに基づいて回答できるか否かを測定することとした。なお、2の結果に基づいて、対象者をA、勢力者をBにあてはめた。作成された内容は以下の(1)-(4)である。

(1) 絵本の場面 ①A君(ちゃん)は絵本をかごにしまって部屋をでます。②その後、B君(ちゃん)が入ってきて、絵本をかごから出して読んで行きます。③読んだ後、B君(ちゃん)は絵本を、かごではなく箱にしまって部屋を出ていきます。④その後、再びA君(ちゃん)が部屋に入ってきました。絵本の続きを読みたいのですが、絵本を取りに、かごと箱、どちらに行くでしょうか。

(2) 人形の場面 ①A君(ちゃん)は人形をかごにしまって部屋を出ます。②その後、B君(ちゃん)が入ってきて、人形をかごから出して遊びます。③遊んだ後、B君(ちゃん)は人形を、かごではなく箱にしまって部屋を出ていきます。④その後、再びA君(ちゃん)が入ってきました。人形で遊びたいのですが、人形を取りに、かごと箱、どちらへ行くでしょうか。

(3) ボールの場面 ①A君(ちゃん)はボールをかごにしまって部屋を出ます。②その後、B君(ちゃん)が部屋に入って来て、ボールをかごから出して遊びます。③遊んだ後、B君(ちゃん)はボールを、かごではなく箱にしまって部屋を出ていきます。④その後、再びA君(ちゃん)が部屋に入って来ました。ボールで遊びたいのですが、ボールを取りに、かごと箱、どちらへ行くでしょうか。

(4) ブロックの場面 ①A君(ちゃん)はブロックをかごにしまって部屋を出ます。②その後、B君(ちゃん)が入って来て、ブロックをかごから出して遊びます。③遊んだ後、B君(ちゃん)はブロックを、かごではなく箱にしまって部屋を出ていきます。④その後、再びA君(ちゃん)が部屋に入って来ました。ブロックで遊びたいのですが、ブロックを取りに、かごと箱、どちらへ行くでしょうか。

他者理解の測定 各場面の様子を示した絵(Figure 3)を提示しながら読み聞かせた後、各児に以下の誤信念、信念、願望、意図に関する質問を行った。

1. 誤信念の測定 各場面の物語を読み聞かせた後、物語の対象者 A はかごと箱のどちらに取りに行くかを質問し、「かごに取りに行く（1点）」、「箱に取りに行く（2点）」から選択させた。

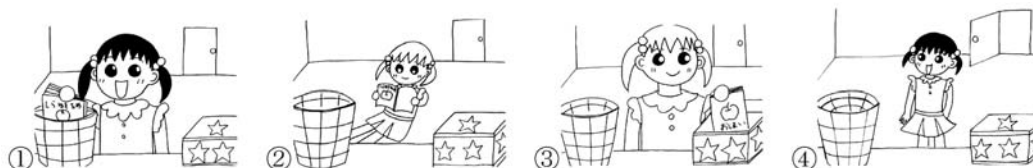


Figure 3 絵場面を示した絵（女兒用）

2. 信念の測定 勢力者 B は対象者 A が絵本を読んでいたことを知っていたか否かについて質問し、「知っていた（1点）」、「知らなかった（2点）」、「その他」から選択させた。

3. 願望の測定 勢力者 B は対象者 A を困らせたいと思って、絵本をかごから箱に移したのか否かについて質問し、「困らせたいと思った（1点）」、「困らせたいとは思わなかった（2点）」、「その他」から選択させた。

1. - 3. のいずれにおいても、回答が誤りなら 1 点、正解なら 2 点で評定することとしたが、物語の内容と関係のない回答があった場合は 0 点とした。また、回答できなかった場合は分析の対象から外した。

4. 意図の測定 「B 君は A 君にどれくらいいじわるをしようと思って、絵本をかごから箱に移したのかな？」と質問し、その表情を表した絵（吉村，2003）を提示して、「普通」、「少しいじわる」、「いじわる」、「とてもいじわる」の 4 件法で評定させた。

調査の実施 2003年10月中旬に、幼稚園の保育室およびホール内で、個別面接による調査が実施された。なお、調査は、幼児教育を専攻し、事前に面接の訓練を受けた短期大学生（2年）によって実施された。また、調査終了後には、各対象児に対して、実際に起こったことではないことを伝え、調査後の対人関係に支障を来すことがないように配慮した。

結 果

閉鎖性の群化 4つの場面の閉鎖性得点について、Cronbachの α 係数を算出すると.83と高い数値が得られた。そこで、場面あたりの閉鎖性得点を測定し、全体の平均値1.52 (SD=0.56) 以上を閉鎖性 H 群 ($N=15$)、平均未満を閉鎖性 L 群 ($N=31$) とした。

他者理解得点の算出 4つの場面で測定した誤信念、信念、願望、意図得点について、それぞれ場面あたりの平均値を算出し、誤信念、信念、願望、意図各得点として用いることとした。

他者理解における閉鎖性と年児の関係 閉鎖性と年児を独立変数、4場面の誤信念、信念、願望、意図得点の平均値を従属変数として、閉鎖性(2)×年児(2)の二要因分散分析（多重比較は有意水準を $\alpha=.05$ とした Tukey の HSD 法）を行った。

その結果、閉鎖性 H 群の意図得点が、閉鎖性 L 群より高いことが認められた ($F(1, 40) = 5.00$, $p < .01$, $MSE = 0.56$)、また、5歳児の信念得点が4歳児より高い傾向も見られたが ($F(1, 41) = 2.91$, $p < .10$, $MSE = 0.14$)、5%水準での年児の主効果、および閉鎖性と年児の交互作用は認められなかった。そこで、以下の分析では、年児を込みにして、分析を進めることとする。各変数における平均値と分散分析の結果は Table 1 に示された。

Table 1 閉鎖性と年児の関係に関する平均値（標準偏差）と分散分析の結果

閉鎖性A 年児B N	H群		L群		df	分散分析のF値		
	4歳児 6	5歳児 9	4歳児 13	5歳児 18		A	B	A×B
誤信念	1.54 (0.33)	1.53 (0.32)	1.39 (0.35)	1.62 (0.30)		0.08	1.10	1.41
信念	1.75 (0.55)	1.78 (0.26)	1.44 (0.45)	1.82 (0.28)		1.27	2.91 ⁺	2.18
願望	1.74 (0.39)	1.59 (0.32)	1.77 (0.25)	1.79 (0.37)		1.18	0.33	0.59
意図	2.60 (1.28)	1.94 (0.85)	1.75 (0.62)	1.71 (0.51)		4.96*	2.04	1.58

⁺ $p < .10$, * $p < .05$

他者理解における閉鎖性と性別の関係 閉鎖性、性別を独立変数、4場面の誤信念、信念、願望、意図得点の平均値をそれぞれ従属変数として、閉鎖性(2)×性別(2)の二要因分散分析を行った。

分散分析の結果、意図において性別の主効果が認められた ($F(1, 40) = 4.73, p < .01$)。下位検定の結果、男児が女児より高かった。さらに、意図では、閉鎖性と性別の交互作用も認められた ($F(1, 40) = 7.43, p < .01, MSe = 0.49$,

Figure 4)。すなわち、閉鎖性H群では、男児の意図得点が女児より高く ($t(28) = 2.91, p < .01$)、いじわると帰属していることが示唆された。

なお、誤信念、信念、願望各得点では、いずれにおいても有意差は認められなかった。各変数における平均値と標準偏差および分散分析の結果はTable 2に示された。

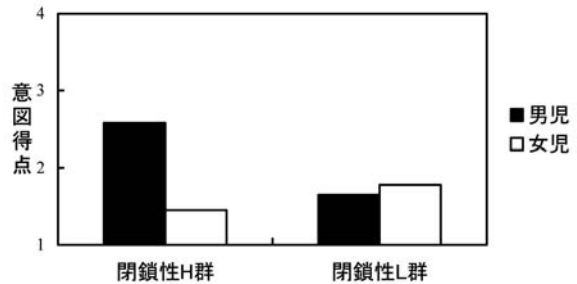


Figure 4 意図における閉鎖性と性別の交互作用

Table 2 閉鎖性と性別の関係に関する平均値（標準偏差）と分散分析の結果

閉鎖性A 性別B N	H群		L群		df	分散分析のF値		
	男 10	女 5	男 14	女 17		A	B	A×B
誤信念	1.50 (0.35)	1.60 (0.22)	1.42 (0.32)	1.61 (0.33)		0.11	1.95	0.21
信念	1.75 (0.42)	1.80 (0.33)	1.61 (0.41)	1.72 (0.40)		0.72	0.37	0.05
願望	1.60 (0.38)	1.75 (0.25)	1.79 (0.29)	1.78 (0.35)		0.98	0.41	0.52
意図	2.58 (1.03)	1.45 (0.67)	1.65 (0.57)	1.78 (0.53)		1.67	4.73*	7.43**

* $p < .05$, ** $p < .01$

考 察

本研究では、幼児の閉鎖性と誤信念、信念、願望、意図の理解との関係に性差が見られるか否かを検討した。以下では、得られた結果に基づいて考察を行う。

本研究の目的は、閉鎖性 H 群では、男児の誤信念、信念、願望、および意図が、女児に比べて、いじわるに方向づけられるか否かを明らかにすることであった。このことは、閉鎖性と性別の交互作用およびそれに関連した検討をすることで考察できる。本研究では、意図において、閉鎖性と性別の交互作用が認められた。すなわち、閉鎖性の強い群では男児の方が女児より勢力者の意図をいじわると帰属していることが示された。しかし、誤信念、信念、願望においては、このような結果は得られず、仮説は部分的な支持を得るに止まった。

Kagan (1969) によると、男児の攻撃行動は黙認されやすい一方で、女児では攻撃行動の抑制が求められやすい。勢力者の特徴の1つには、体格・体力・腕力が含まれている。男児の場合、勢力者を対象としたことによって、攻撃行動と関連づけて、勢力者の意図を帰属することによって、意図を不当にいじわると解釈しやすかったことも考えられる。いいかえると、勢力者の存在が、仲間関係の性差を規定するとともに、他者理解の発達をも規定する要因であることが考えられる。

以上のことから、本研究で得られた知見は、閉鎖性が強い男児は勢力者の意図をいじわると解釈しやすいことであった。すなわち、幼児期の他者理解は対人行動のあり方に規定されること、またその様相は男児にあてはまることが示されたといえる。本研究で取り上げた閉鎖性は、特定の友人以外の仲間には排他的である態度であったが、その得点が弱いことが、開放的であるのか、あるいは開放的か閉鎖的かを内省できないことを意味しているのかは特定できない。閉鎖性だけでなく、開放性も意味する検討を加えることが今後の課題であると思われる。

ところで、本研究では、方法上においても課題が残された。本研究は、仮想場面を取り上げたことから、対象者がどこまで内省できたかが不明である。自然観察による結果との整合性を追究することも今後の課題といえる。また、場面間の一貫性についても検討されていないことから、課題の質的向上を図ることも必要である。さらに、他者理解と対人行動の発達を具体化するためには、幼児期から児童期を経て、吉村 (2004, 2005) で示された青年期の結果への過程を解明することが不可欠である。

このように、本研究に残された課題は多いことから、あくまでも予備的検討として位置づけなければならない。それでも、他者理解の発達を規定する要因の1つとして、閉鎖性が挙げられることが示唆された点で、本研究は意義があったと思われる。

引用文献

- ベネッセ教育研究所 2000 第2回幼児の生活アンケート報告書－1歳6カ月～6歳（就学前）の幼児を持つ母親を対象に－ ベネッセコーポレーション
- 橋本憲尚 1996 子どもはいつから信念－願望のシエマを発揮するか 発達, 66, 44-51.
- Kagan, J. 1969 *Personality development*. NewYork: Harcourt Brave Jovanovich. (ケイガン, J. 三宅和夫 (監訳) 1979子どもの人格発達 川島書店)
- 子安増生 1999 幼児期の他者理解の発達－心のモジュール説による心理学的検討－ 京都大学学術出版会
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science*. NewYork: McGraw-Hill. (レヴィン, K. 猪

- 股佐登留 (訳) 1956 社会科学における場の理論 誠信書房)
- Moses, L. J. 1993 Young children's understanding of belief constraints on intention. *Cognitive Development*, 8, 1-25.
- 内藤哲雄 1986 対人関係の発生と発達 対人行動研究会 (編) 対人行動の心理学 誠信書房 Pp.3-19
- Perner, J. 1989 Is "thinking" belief?: Reply to Wellman and Bartsch. *Cognition*, 33, 315-319.
- Perner, J., & Wimmer, H. 1985 "John thinks that Mary thinks that...": Attribution of second-order beliefs by 5- to 10-year-old children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 36, 459-474.
- 斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ 1986 仲間関係 無藤 隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編) 子ども時代を豊かに—新しい保育心理学— 学文社 Pp.59-111.
- Wellman, H. M. 1990 *The child's theory of mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 吉村 斉 2002 幼児の小集団行動と他者理解の関係—心の理論に基づいた意図の帰属過程— 高知学園短期大学紀要, 33, 19-28.
- 吉村 斉 2003 子育てに悩んだ時の心理学 岩崎電子出版
- 吉村 斉 2004 女子学生の専門職就職意欲および学生生活への満足を規定する要因—自己表現と小集団閉鎖性に注目して— 青年心理学研究, 16, 1-14.
- 吉村 斉 2005 部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係 教育心理学研究, 53, 151-161.

付 記

本研究は、平成15年度「発達心理学Ⅱ」を受講した高知学園短期大学幼児教育科2年生38名の協力を得て、準備・実施されました。皆様に深く感謝いたします。また、調査にご協力いただいた幼稚園の先生方、園児の皆様にも改めて謝意を表します。最後に、本論文の掲載にあたって査読をしてくださった先生方に厚く御礼申し上げます。

(2006年9月29日受付；2006年11月2日受理)